

# 海からの警告

豊かな循環へ

漁船に乗った子どもたちが手にい  
っぱい種をつかみ、海に放っていく。

備前市日生町地区の鹿久居島沖で  
昨年9月27日、海草・アマモの種ま  
きが行われた。地元の中高生や企業  
の関係者約90人が10隻ほどに分乗  
し、あらかじめ花枝から採取してお  
いた種を浅瀬にまく。漁師が約40年  
も前から全国に先駆けて始めた試み  
は、毎年秋に行われる地域ぐるみの  
恒例行事となっている。

一時激減していた藻場は徐々に回  
復し、今ではモエビやメバル、スズ  
キなどが見られる。岡山県水産研究  
所（瀬戸内市牛窓町鹿忍）によると、  
鹿久居島周辺では、約10年前と比べ  
て魚の種類がおよそ3倍の14種類  
に、個体数は8倍ほどに増え、職員  
は「アマモの密度も高まったため、  
より魚がすみやすくなったのだろ  
う」と話す。

RS230601

## ② アマモ場

る魚も減り、地元漁師が県とともに  
再生活動に乗り出した。

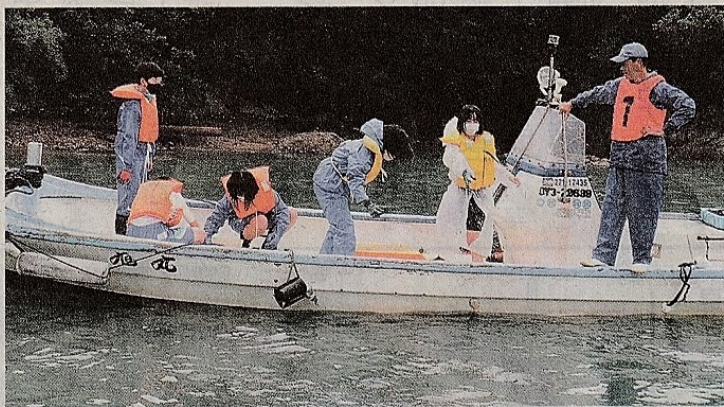
当初は種から芽が出ても潮に流さ  
れて根付かず、試行錯誤の連続だっ  
た。今のようにカキ殻を海底に敷き  
詰めて流出を防ぐ方法に行き着くに  
は、約10年の歳月を要した。

カキ殻を敷くと、アマモの根が絡  
まって定着しやすくなった。海底の  
泥が拡散するのを防いで海水の透明  
度を高める効果もあり、日光をよく  
通して光合成を促す。地元が国内有  
数のカキ産地のため、手軽に殻を入  
手し、再利用できる好条件もあった。

2005年ごろから本格導入する  
と、藻場は250秒まで回復した。

カキ殻以外では、海砂や土壌改良  
機能のある鉱物を海底に敷いたり、  
種を埋め込んだマットを沈めたりと  
さまざまな手法を試したが、効果も  
価格の安さもカキ殻には及ばなかつ  
た。

アマモ場を再生する動きは県内外  
に広がっているが、日生町地区のよ  
うな成功例はまだ少ない。16年から  
種をまく玉野市の胸上漁協では、繁



備前市日生町地区の海でアマモの種をまく子ども  
たち＝2022年9月27日（上）と同地区に繁茂した  
アマモ場＝5月8日

殖したエリアがごく一部にとどま  
り、同年から取り組む浅口市の寄島  
町漁協でもほとんど生えていないと  
いう。

その理由は不明だが、潮の流れや  
水深、光量などさまざまな要因が絡  
んでいると言われる。半世紀にわた  
りアマモの生態を研究する元県職員  
の福田富男さん（76）は「海底にたま  
ったヘドロが影響している可能性も  
ある。地盤が軟らかいので根を張っ  
ても流出しやすい」と分析する。

さらに近年は新たな逆風も吹いて  
いる。地球温暖化に伴う海水温の上  
昇だ。

アマモは高温に弱く、地下茎を  
伸ばして繁殖する際、水温が28度を  
超えると枯れてしまつとされる。県  
の沿岸部は瀬戸内海の中でも水深の  
浅いエリアが多いため、水温が上昇  
しやすく、真夏には30度程度に達す  
ることもあるらしい。

国立研究開発法人水産研究・教育  
機構（横浜市）の堀正和グループ長  
（48）は「アマモが育ちやすい水温に  
なるのは数年に一度、10年に一度  
といった具合に減少傾向にある。数  
少ないチャンスをつかむためにも、  
毎年根気よく種をまき続けることが  
大切だ」と話している。

（良田桃子）

## 第4部 再生

# 温暖化も繁殖の逆風に

日生町地区はもともとアマモ場が  
多く、1950年代には590秒も  
の面積があったが、高度経済成長期  
以降の護岸整備や埋め立てによって  
85年にはわずか12秒となった。取れ